

むすびどうだい
結燈台について

昔ながらの明かりには短檠、竹檠、行灯などがあり、それぞれ茶室の広さや、場所により使い分けられます。この度は燈具のなかで最も簡素な結燈台を紹介いたします。

細い三本の木を、中程のところで結び、立鼓のように広げて上にかわらけを載せるだけの簡素なものです。燈台の始まりの姿をとどめているのではないのでしょうか。故実家の伊勢貞丈（一七一一—一七八四）は『女斎随筆卷之二』に、宮中で用いる調度として次のように記しています。むすび燈台の図 禁中にて夜公事を



結燈台 利斎作 江戸時代

上を結ぶ緒も是れに同じ。下の緒は三つ足をつなぎおくなり。柱の上の緒の穴は柱三本を順にねぢ又合せて見てよい所にあぐべし、みだりにあけては悪し。木は櫛ノ木ナリ。元文大嘗会絵巻物にはこの下の緒はなし、下の緒なく

行はるる時用之。細く丸き木を三つかなわにすそをひ



ろげ、上すぼくゆいて其の上は燈蓋を置くなり、油火なり。木の長さ二尺五寸五分（約77cm）、木口の丸みの径、上は四分（約1cm）下は六分（約2cm）。三本足の開きたる間一尺八寸程（約55cm）つつ。上の木口より四寸三分（約13cm）下に穴を明けて緒を通して三本の柱をねぢりて結ぶなり。柱の下、木口より六分（約2cm）上に穴を明けて緒を通し一本ごとに結びて男結にするなり、三本とも同じ。緒の両端は柱の際にて取り合い結び切る。緒の太さ「図あり」是れ程なり、麻にて三つくりなり。

てもよろしかるべし

とあり、柱の太さや材についてはまでが詳細に記載されています。但し同じ伊勢貞丈の記した『貞丈雑記卷之八（調度之部）』では、結び方や、柱は柳の白木を使うなどいくつかの異なる点があり、江戸時代では既に混乱した部分があったように見られます。

この宮中で使われてきた結燈台が、いつ頃から茶席を照らすようになったのかは不明ですが、『茶道筌蹄』によれば

加茂神前にあるを、如心斎仮用ゆ。但し一寸巾（約3cm）の美濃紙をコヨリにして、上より三寸五分（約10cm）下にて、五巻マムスビ、二本は前、此間へ火皿をさし込み、油蓋も上よりさし込む。木は何にても皮付を用ゆ。○但し四畳半迄用ゆ。

とあるように、表千家七代如心斎（一七〇五—一七五二）が、加茂神社で用いられていたものを手本に、紐は紙縊を使い、木は皮付であれば構わないとしています。四畳半以下の小間で用いるとされているところから、寸法も小さくなったと考えられます。

平成十八年新春展陳列の結燈台（写真上）は高さ45・8cmで、半分程

の高さです。短檠や竹檠なども同じくらいの高さであることから、座して用いるのに、程よい高さが決まってきたのでしょう。また、紙縊を通す穴が無く自在に使えるようになってきます。材は萩を用いています。

いま一つ松竹梅で作られた結燈台の例を紹介します。無限齋好の松竹梅蓋置は、箱に無限齋が「宗興判以成婚式結燈臺好 今日主（花押）乙未春」と墨書されているように、昭和三十年鵬雲齋大宗匠の婚儀に、



松竹梅蓋置 岩木秀齋作

式場で結燈台が用いられました。このうちの一对を記念として蓋置に仕立てたものです。全部で十五個作られ、脚の底部は溜塗、円形の裏には鵬雲齋の花押があります。（鎌塚宏子）